**『多言語対話型評価法』（会話力・読書力）指導者養成ワークショップ**

１．ワークショップの目的

「多言語対話型評価法」の理論と技術を身につける。会話力テストと読書力テストの二つの種類がある。

２．多言語対話型評価法とは

定義：子どもの話す力と本を読む力を対話（インタビュー）を通して推測しようとする技術（テスト法）

趣旨：子どもが海外で暮らしたり、両親の母語が異なっていたりする場合子どもは多言語の環境にさらされる。その場合子どもの言語は、外国語が母語の言語発達を追いかけるように、あるいは母語の発達を追い越す形で発達し、二つの言語を習得していく。二つ以上の言語が母語として発達することもある。

このような状況下にある子どもの言語能力を正しく測ることがこのテスト法の目的である。

特徴：

１）能力を引き出して測る

子どもは精神的に発達段階にあり、言語能力の発現は気分などに大きく左右される。対話を通して子どもの能力を引き出し、「できる」自信を持たせること、査定のインタビューを通しても子どもの言語力を向上させることを、鉄則とする。

２）母語と外国語（社会で使われている言語）の両方の能力を見る

子どもは、言語能力の発達段階にある。このテストではその子どもの言語能力が、発達のどの段階にあるか、母語と外国語の両方で測る。母語の発達も遅れている場合には、その原因を注意深く探り、適切な対応がとれる。外国語の発達が遅れている場合は、教室活動への支障がでないように教育的措置をとれる。

３）文字を媒介としないで測る

子どもは話しことばが書くことより先に習得されるため、文字を媒介としない方法で能力を測る。そのために対話（インタビュー）形式を用いる。

４）「文法語彙」「対話力」「認知」の３面から見る

いわゆる「読む書く聞く話す」のような４技能ではなく、基本的な言語知識（文法語彙）が習得されているか、場面に依存した会話が行えるかどうか、順を追って説明したり理由を述べたりするような認知的に高度な言語活動ができるかどうかという３つの側面を意識的に区別して測る。

方法：

会話力、読書力とも、インタビューの流れを細かく定めてある。測定者は、その流れ（フローチャート）にそってインタビューを進め、終了後に録音テープを聞き直しながら、採点する。会話力は１５分、読書力は３０分程度である。

会話力テストには単語カードとイラストカードを、読書力テストには年齢別テキスト（てのひら文庫など）と、それに基づいて書き下ろしたインタビューガイド（インタビューの言葉を細かく記し、子どもの反応を記録する書式がつけてあるもの）を用いる。

参考資料：

『OBCワークショップ資料集』（中島和子）、『多言語対話型評価法』（中島和子・櫻井千穂）

評価：

「言語知識」「対話力」「認知」の３つの面にわけて採点し、総合的に、言語発達がどの段階にあると認められるかを説明する。段階は６段階に分けている。

３．評価法開発の経緯

会話力テストは１９９０年代の後半にカナダの日本語教育振興協会がトロント大学の中島和子教授（現名誉教授）を中心に、主に帰国子女の日本語教育に資することを目的として開発した。

２０００年代初頭に、国立国語研究所が中島和子教授をメンバーに加えて、日本全国の移民労働者などの子女を中心に、大規模日本語力調査を行った。そのプロジェクトでこの測定法の原型となるものを使用した。その後、中島和子教授を中心にニューインターナショナルスクールで、読書力テストの開発がすすめられた。

２０００年代後半に真嶋潤子教授を中心に大阪大学で研究が進むと同時に、指導者養成のためのワークショップを開催し、ツールやマニュアルを整えた。

４．ワークショップについて

事務局：国際基督教大学教育研究所（所長ジョン・C・マーハ教授）鈴木庸子（所属は日本語教育課程）。

講師：中島和子トロント大学名誉教授、石井恵理子東京女子大学教授、櫻井千穂大阪大学非常勤講師の３名。

期間と参加者：

２００９年から２０１３年３月までに、１回１８時間から２４時間（３日から４日間）のワークショップを１１回行い延べ２２０人以上が参加した。参加者は、学校の先生、ボランティア指導員、日本語教育をめざす学生、研究者、海外補習校の先生など。

成果：

１．学校の先生は、自分のクラスに外国につながる子どもが入ってきたときに適切な対応がとれる。

２．ボランティア指導員および補習校の教師らは、自分の指導の成果を科学的に判断でき、よりよい指導に生かせる。

３．日本語教育をめざす学生は、子どもの日本語習得と評価法を学び、教師の力量を増すことができる。

４．研究者は、研究のツールとして身につけ、より洗練された研究が行える。

開催地：三鷹ネットワーク大学（東京都三鷹市）、国際基督教大学（東京都三鷹市）、東京女子大学（東京都杉並区）、桜美林大学（東京都新宿区）、大阪府教育センター（大阪市）、豊川市勤労福祉会館（愛知県豊川市）、NPOアハペ（神奈川県大和市）。

開催の資金：文化庁平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育支援事業、「平成24年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）継承日本語教育に関する文献のデータベース化と専門家養成」（課題番号21320096、研究代表者中島和子）および「日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から再構築する試み」（課題番号21610010、研究代表者真嶋潤子）および参加費

ウェブサイト：ワークショップの予定、関係資料等は次のホームページに掲載し、参加者の便宜をはかっている。

<http://subsite.icu.ac.jp/people/suzukiyo/kids/kidshome.html>

以上